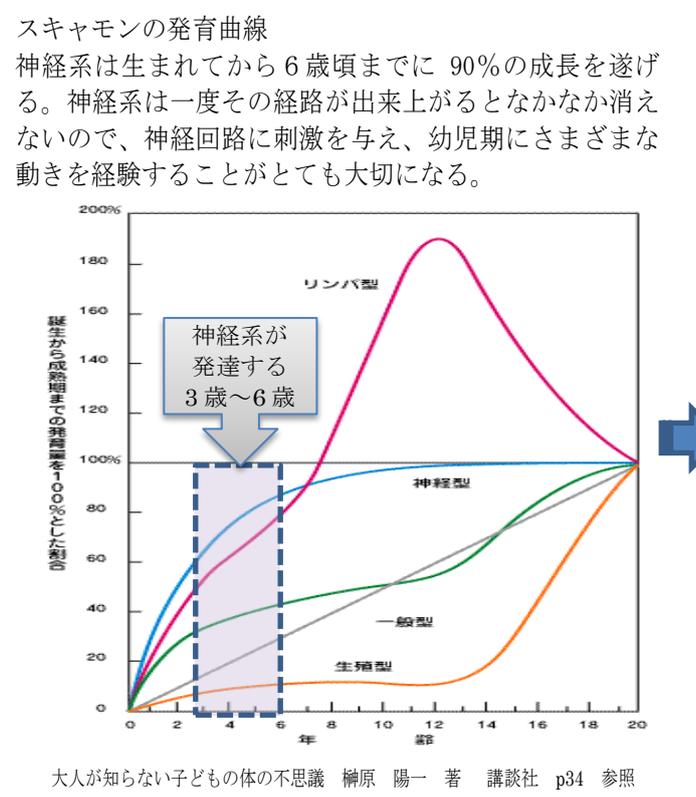


1. 幼児行動関係分析について

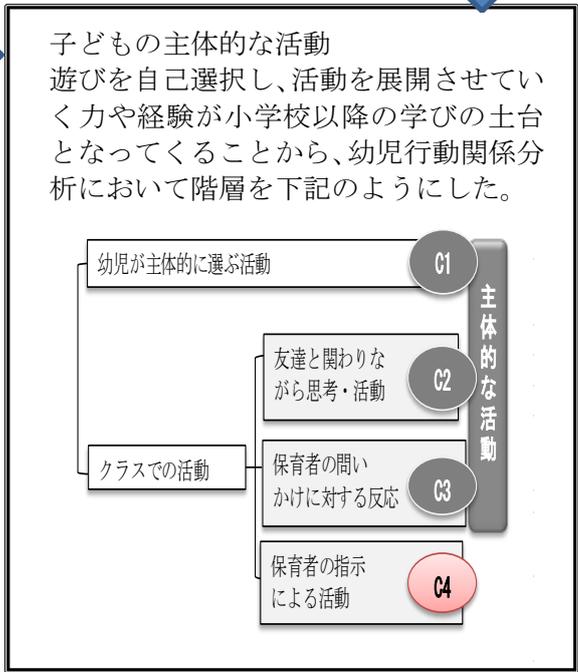
①幼児行動関係分析の階層

E. H エリクソンの発達理論幼児期後半 (3~6 歳)
 自分で考えて自分で行動することを覚え、成功体験を重ねることで自信を持つこととなる。
 ・E.Hエリクソン 仁科谷弥生訳 (昭和 52 年)『幼児期と社会1・2』みすず書房 参照



内発的な動機づけ
 ・内発的な動機づけを支えているものがある。それは、「自己決定感」「有能感」「他者受容感」という3つの要素だ。自己決定感とは「自分のことは自分で決めている」という気持ちであり、有能感とは「自分なら頑張ればできる」という本人の気持ちである。他者受容感とは「自分は周りの大切な人から受容されている」という気持ちである。この3つの要素が自ら学ぶ意欲をもたらし、楽しさや満足感が生まれる。
 ・外発的な学習意欲は、主に自己決定感が欠けている場合であり、知的好奇心・達成・挑戦といった行動傾向は少なく、他者依存的な行動が多く見られ、学ぶことが楽しいとは感じられないのである。
 学習意欲の心理学 自ら学ぶ子どもを育てる 桜井 茂男 著 誠信書房 pp18-22 参照
 別紙3

社会の変化
 ・多様で変化の激しい社会 (生産年齢人口の減少・グローバル化の進展・技術革新等)
 ↓
 求められる力
子供たち
 ・未来を切り開いていく力が必要
教育
 ・「どのように学ぶか」という、学びの質や深まりを重視することが必要
 ・課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習やそのための指導方法を充実させていく必要
 初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について (諮問) 平成 26 年 11 月 20 日 中央教育審議会 参照



幼児教育の指針として、幼稚園教育要領と保育所保育指針整合性が図られている。
 ・遊びを通しての指導
 ・子どもが自発的、意欲的に関われるような環境を構成し、子どもの主体的な活動や子ども相互の関わりを大切にすること。
 別紙2

②幼稚園教育要領と保育所保育指針の関係

幼児教育の指針として幼稚園教育要領と保育所保育指針整合性が図られている。

幼稚園教育要領	保育所保育指針
<p>第1章総則 第1 幼稚園教育の基本</p> <p>1. 幼児は安定した情緒の下で自己を十分に発揮することにより発達に必要な体験を得ていくものであることを考慮して、<u>幼児の主体的な活動を促し、幼児期にふさわしい生活が展開されるようにすること。</u></p> <p>2. <u>幼児の自発的な活動としての遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習であることを考慮して、遊びを通しての指導を中心として第2章に示すねらいが総合的に達成されるようにすること。</u></p> <p>3. 幼児の発達は、心身の諸側面が相互に関連し合い、多様な経過をたどって成し遂げられていくものであること、また、幼児の生活経験がそれぞれ異なることなどを考慮して、<u>幼児一人一人の特性に応じ、発達の課題に即した指導を行うようにすること。</u></p>	<p>第1章総則 3 保育の原理 (2) 保育の方法</p> <p>ア <u>一人一人の子どもの状況や家庭及び地域社会での生活の実態を把握するとともに、子どもが安心感と信頼感を持って活動できるよう、子どもの主体としての思いや願いを受け止めること。</u></p> <p>イ <u>子どもの生活リズムを大切にし、健康、安全で情緒の安定した生活ができる環境や、自己を十分に発揮できる環境を整えること。</u></p> <p>ウ <u>子どもの発達について理解し、一人一人の発達過程に応じて保育すること。その際、子どもの個人差に十分配慮すること。</u></p> <p>エ <u>子ども相互の関係作りや互いに尊重する心を大切に、集団における活動を効果あるものにするよう援助すること。</u></p> <p>オ <u>子どもが自発的、意欲的に関われるような環境を構成し、子どもの主体的な活動や子ども相互の関わりを大切にすること。特に、乳幼児期にふさわしい体験が得られるように、生活や遊びを通して総合的に保育すること。</u></p> <p>カ <u>一人一人の保護者の状況やその意向を理解、受容し、それぞれの親子関係や家庭生活等に配慮しながら、様々な機会をとらえ、適切に援助すること。</u></p>

幼児期に大切にしたいこと

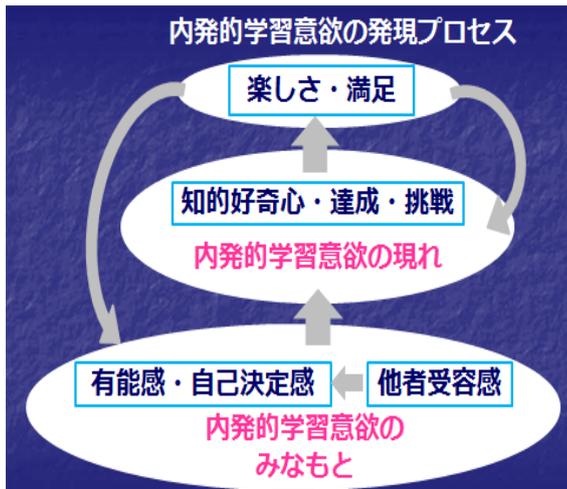
- ・子どもと保育者との信頼関係を基盤とする。
- ・子どもの主体的な活動を大切にし、適切な環境の構成を行う。
- ・子ども一人一人の特性と発達の課題に即した指導を行う。



幼児行動関係分析におけるポイント

子どもの主体的な活動 遊びを通して指導

③内発的動機づけ



まず、内発的な動機づけを支えているものがある。それは、「自己決定感」「有能感」「他者受容感」という3つの要素だ。自己決定感とは「自分のことは自分で決めている」という気持ちであり、有能感とは「自分なら頑張ればできる」という本人の気持ちである。他者受容感とは「自分は周りの大切な人から受容されている」という気持ちである。この3つの要素が自ら学ぶ意欲をもたらし、楽しさや満足感が生まれる。

「内発的学習意欲」の意欲のみなもと

自己決定感・「自分のことは（好んで）自分で決めているんだ」という気持ち

自ら好んで自己決定すること、すなわち自発性を育てること

自分ができることを自分でする、この経験を積み重ねていくと次第に自分のことは自分で決定し、自分でやっていきたいと思うようになる。こうして自発性は育成されるのである。自己選択させることを幼児期から導入してほしいと考えている。

有能感・・・「自分は勉強ができるんだ」「自分はやろうと思えば勉強ができるんだという気持ち」

他者受容感・「自分はまわりの大切な人から受容されているんだ」という気持ち

子どもたちに安心できる場を提供する要素であると考えられている。まわりの人から受容されていればこそ、びくびくせず安心して勉強ができる。自分を見守ってくれる人がいれば、たとえ勉強につまずいてももう一度やりなおしてみようという気持ちになれる。有能感や自己決定感を子どもたちに形成するためにも、他者受容感は重要な要素である。

「内発的学習意欲」の現れ

知的的好奇心・「いろいろなものに興味をもち、興味をもったことに関連する情報を集める行動傾向」

達成・・・「最後まで自分の力でやり抜こうとする行動傾向」

挑戦・・・「自分が現在できる課題よりも少し難しい課題に挑戦しようとする行動傾向」

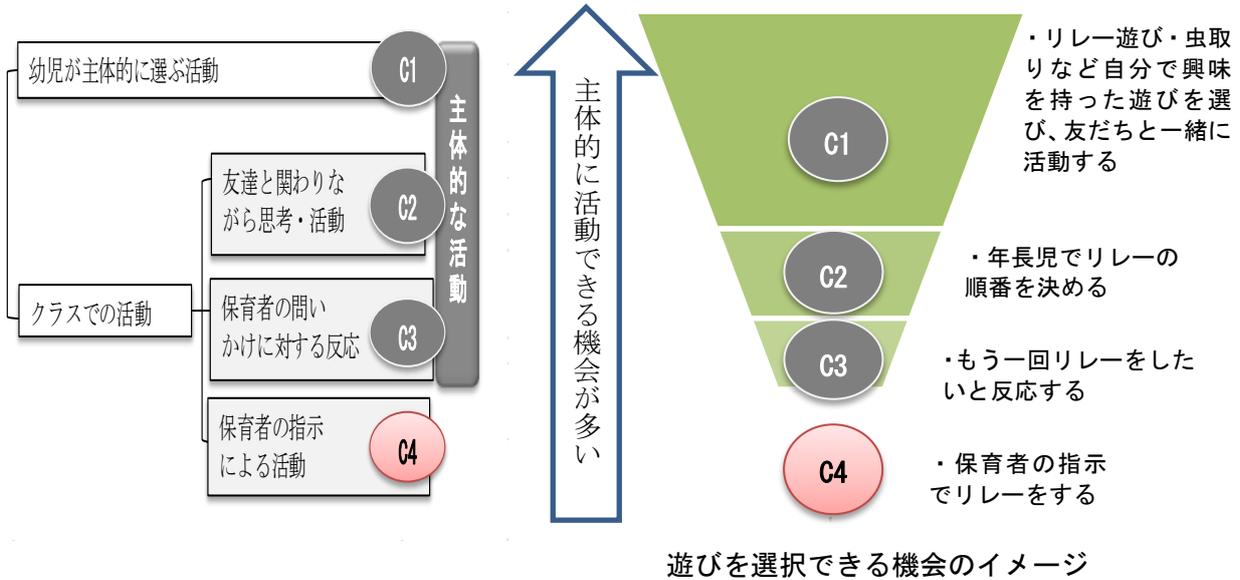
知的的好奇心・達成・挑戦といった行動傾向は、明らかに有能感と自己決定感に支えられた内発的な学習意欲の現れである。こういった行動傾向に支えられて、「学ぶことが楽しい」「学ぶことが素晴らしい」「やっと解けた」というプラスの感情経験を持ち、フィードバックされる。

・外発的な学習意欲は、主に自己決定感が欠けている場合であり、知的的好奇心・達成・挑戦といった行動傾向は少なく、他者依存的な行動が多く見られ、学ぶことが楽しいとは感じられないのである。

学習意欲の心理学 自ら学ぶ子どもを育てる 桜井 茂男 著 誠信書房 参照 p18-22 p125・126

桜井の内発的学習意欲の発現プロセスは、自己選択し決定することが大切とされており、幼児期からの導入を提案されている。アプローチカリキュラムにおいては、遊びを自己選択し決定することが特徴として表れており、遊びの意欲発現プロセスともほぼ同じであると考えられる。

④ 幼児行動関係分析の具体



幼稚園教育要領と保育所保育指針における幼児教育の指針として、子どもの自発的・主体的な活動としての遊びを通して指導することが明記されている。幼児の自発的な活動としての遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習であり、小学校へつながる学びの芽生えになっている。

幼児行動関係分析において、C1 は、幼児が興味を持って遊びに主体的に関われる活動になっている。「リレーは楽しそうだ」「昨日の遊びの続きがしたい」「〇〇ちゃんと一緒に遊ぼう」など、どの遊びをするか思考・判断して自己決定している。また、活動途中であっても楽しそうな遊びがあれば、「寄せて」と自分から声をかけて参加している。一つの遊びに夢中になる時もあれば、次々と楽しいことを見つけ活動が広がり深まる時もある。興味を持って選択することは意欲につながり、友達との関わりの中で自然とコミュニケーションも多くなる。このことから、主体的な活動において、C1 は年長児が遊びの内容や場、仲間を自己選択でき、最も自発的・意欲的に人や物に関わる活動になっていると言える。

C2・C3・C4 は、クラスでの一斉活動になるため、活動内容が保育者から伝えられる。同じ活動の中で、友達と関わりながら思考・活動したり、保育者の問いかけに対する反応をしたり、保育の指示による活動をしたりする。一斉活動においては、保育者の問いかけによって、子どもが自分たちで決めて活動したという気持ちになるよう、友達と関わりながら思考・活動する場面 C2 や保育者の問いかけに対する反応 C3 を持つことが大切であると言える。保育者が活動において子どもが主体である意識がなければ、「今から〇〇をするので、〇〇を準備してすわります。次に〇〇をします。」等保育の指示による活動 C4 が続くことになる。